

宮城方言における「だから」と「んだ」の会話分析的研究

一同調表現としての相互行為的機能一

阿部春香(筑波大学大学院生)

1. はじめに

本研究は、宮城方言話者の使用している同調表現「だから」を会話分析の手法を用いて分析し、「だから」の持つ相互行為的意味を明らかにすることを目的としている。一般に共通語で使用される「だから」は理由、因果関係や、追加説明、反復といった様々な用法を持つ接続詞として使用されているとされる(日本記述文法研究会, 2009)。しかし、宮城方言においては、「だから」には共通語の用法のみならず、以下の断片1で示すような同調を示す用法もある。断片1のS, H, Bは姉弟である。データ録画がなされる前に、SとHはBのバイト先のスーパーへ行き、Bの様子を見に行っていた、

断片1 [姉弟_うな巻き 7:02]

((録音日にSとHはBのバイト先のスーパーに様子を見に行っていた。おばあちゃんというのはBのバイト先の人である。))

- 1 S: おばあちゃんと一緒だったの? 今日
- 2 B: ° うん°。なんで買ってきてくれなかったの:: うな巻き:
- 3 H: ° ハルナうなぎ嫌いなんだよね°
- 4 B: おめ:: が買う-食うんじゃない。ハジメが食いたがったんだ:
- 5 H: > えそんなん知らないしく
- 6 S: > ° じゃあ° 言えばよがったじゃん< =俺これ食いたいがら買ってよ[[て
- 7 → H: [だから。
- 8 B: わざわざ見つけて出で行くのめんどくさいじゃん。(舌打ち) あ: 来た:: こいづらみたいになったたんだもん
- 9 H: 分がったんだったら来いよ
- 10 → S: > ん↑だ: 来い<
- 11 B: なんで来ないどいげないのや::
- 12 H: だって[うなぎ
- 13 S: [んだがら買わないんだっちゃ
- 14 B: 気を利かせでがら-買ってきてくれんの がなって思ったのに

本研究で対象となるのは、7行目Hの「だから」である。この断片において、Bは自分のバイト先に来たのであれば、その日売られていた「うな巻き」をなぜ買ってこないのかとSとHを責める(2行目)。それに対して、Sは買ってきてほしければ、SとHに言いに来るべきだったと述べ(6行目)、Hは「だから」と産出しSへの同調を示している。この「だから」は、共通語における「そうだね」「その通りだ」という意味に近い表現として使用されている。甲田(2019)によれば、このような宮城方言の「だから」による同意は、直前の発話を前件としてその状況を認めるような、強く同意を示すものであるとされている。「だから」による同調が強い同意であるという指摘は、示唆的ではあるが、強い同意としての使用はいかに達成されているのか、会話参加者の立場においていかなる意味で強い同意であるのかという記述はされていない。本研究は、宮城方言の「だから」が実際どのような同調として使用されているのかという会話参加者の視点に立ち、分析を進める。

本研究では、宮城方言の「だから」の相互行為的意味をより詳細に捉えるため、同じ宮城方言内においてやはり同調表現として使用される「んだ」の分析も行った。断片1における10行目Sの発話の「んだ」が本研究の分析対象となる。10行目Sの発話は、直前にHがバイト先にSとHが来ていることが分かっていたのであれば、SとHのもとに来るべきであったということに同調を示すものである。このように、宮城方言の「だから」、「んだ」との比較から、それぞれどのような相互行為的意味を持つのか、どのような問題を解決するものかを分析していく。

2. データの概要

本研究では、2018年5月から2019年3月までに収集した会話データを用いている。そのうち電話データは2本、ビデオデータは20本である。協力者は宮城県出身で在住歴が10年以上の10代から70代の男女となっている。ビデオデータ20本のうち、2人会話が11本、3人以上での会話は9本となっている。データの録画の際、会話の具体的なテーマは決めていない。そのため、会話の内容は残業について、買い物に関して、趣味についてなどさまざまである。データの中で分析対象となる「だから」は11例、「んだ」は17例であった。

3. 分析

3.1 宮城方言の「だから」

断片2のSとHは友人同士である。データではSが車を運転し、Hは助手席に座り会話をしている。この2人はHが宮城県に帰省するたびに会っている。データを録画した日も地元のショッピングセンターに行き、買い物をしていた。このデータはショッピングセンターでの買い物が終わった後に撮影したものである。この断片では、地元のショッピングセンターを出て、次の目的地を決めずに車を走らせている場面である。断片の前にも、二度、SはHにどこに行くかを尋ねていた。その度にHはSの質問に対し、具体的な場所を挙げていた¹が、Sは受け入れていなかった。断片の直前に、Sは仙台に行ってもいいのであれば行っていたが、Sの母が夜に今運転している車を使うと述べる。そして、1行目でSは、2人の地元において「楽しい時間」を過ごせるのは夜になってからであり、「この時間(録画時は夕刻)」はショッピングセンターに行ってしまうと、何もすることが無くなってしまふ、という地元への不満を述べている。

断片2 [車内友人2鹿 16:10-]

((コバルトラインとは、二人の地元にあるドライブのための道路で、海岸沿いの山道である。以前二人は別の友人(ミノル)の運転でそこに行ったことがあった))

- 1 S: なんか↑夜になったら↑夜になったで街中歩っても楽しいだろ[うけどさ:::,
2 H: [うんうんうん。
3 S: [この時間がどうしよ[うみたいな hhh
4 H: [この [そう, 間。
5 H: え: グルグル回って¥テキト: に車で¥
6 (2.0)
7 S: ° ね::: ° どご:::?° みたいな° =
8 H: =え¥コバルトライン行く:?¥hhh
9 S: (.) ¥酔う↑:::[:::¥
10 H: [hhahahah
11 S: あたしグロッキー:: なっちゃうから[ミノルの =
12 H: [h グロッキー::hh
13 S: =しかもあだしの車鹿どぶつかりそうに[なっし
14→H: [↑だ(h)か(h)ら(h)ね(h):hh
15 H: [h]あれマジでビビったんだけど
16 S: [まじー
17 S: >そう。くぶつかったらいいかみみみたいな hhha
18 H: すごいよね並走してたもんね
19 S: ね:::

この断片で対象となるのは、14行目Hの「だからね」である。5行目でHは目的地の具体的な候補はあげずに、「この時間」にできることの候補としてSにドライブに行くことを提案する。この発話にSはすぐには反応せず(6行目)、間合いの後で再び「ね:::。どご:::?」という場所の明確化をHに求めている。つまり、SはHの提案に対する明確な反応を引き延ばし

¹ Hが提案したのは「牛山」という場所で、見晴らしの良い場所である。ショッピングセンターからは車で15分ほどにあり近いが、道が舗装されていない山道である。

ていると言える。SがHの提案に対して明示的な受諾の反応を示さない、というやり取りは、断片2の前から起きていた。断片の直前で、Sは「仙台に行っていよいよと言われたら行くだけだよ」と述べ、続けてSの母親が今運転している車をこれから使うと述べる。これらは、SがHの提案を受け入れることができない理由として聞くことが十分に可能である。実際に、直前の断片でHはその発話を「そうなの」と受け入れている。そのやり取りを踏まえ、Sの1, 3行目の発話はSにとって、「何をしたいかを尋ねる」という行為ではなく、「地元に対する不満を述べる」という行為として組み立てられたものと言える。しかし、Hはドライブを続けることを提案し、不満に対しての反応は産出していない。そのHの反応を踏まえ、Sは7行目でどこに行くかの質問をしている。Sは7行目で、自身の発話を引用するような形式「みたいな」を産出し、「場所を決める」ことに距離を置くようなスタンスを取っていると言える。

一方のHは7行目Sの場所の明確化要求に応じる形で、8行目で「コバルトライン」という具体的な場所を提案する。Hは「え」を産出した時点で視線をSに向け、正面に視線を戻しながら笑いを含み、8行目を産出している。6行目のHの発話は視線が正面であったが、8行目ではSに視線を向けている。つまり、HはSから何らかの反応を引き出すことを要請していると言える。Sは8行目で示された場所に行った場合の否定的な状態を述べる(9行目)。この際、Sは明確化要求ではなく、コバルトラインに行った場合の状態(車酔いをする)を述べていることや、Hの笑いに呼応するように笑うことから、SもHと同様に、「コバルトライン」に関して何らかの「笑える」経験を共有していると言える。11行目からSは「車酔いをしてしまう状態」と「鹿がSの車とぶつかりそうになるという」2つの出来事を述べる。車酔いをするという状態そのものは、「コバルトライン」を知る者であれば、理解可能である。しかし、「Sの車が鹿とぶつかりそうになる」は「一般的に車と鹿がぶつかる」ということよりも詳細な経験として提示している。Hが経験を共有していなければ、Sは「Sの車が鹿とぶつかりそうになる」を産出するまでに、これまでの経緯を話さなければいけない。しかし、この断片では、背景の説明を省き、詳細な出来事のみを産出している。このようにすることで、SはHを「自分と共有した経験を持つ者」として見做していると言える。Hも14行目で「だからね」によって同調を示す。HはSのTCUが完結するよりも早く同調を示し、Sの発話を最後まで聞かなくとも理解できるのだということを示している。さらに、笑いとともに発話を産出していることから、Hはその出来事を笑ってもいいこととして理解できるということ、そして語られた出来事が共有されているものであることを示していると言える。Hはさらに続けて、Sが産出した出来事へのH自身の感想を述べ(15行目)、HはSと共有の経験を持つ者として振舞っていると言える。Hがそのように振舞えるのは、自分が語られた経験を共有する者、語られた経験に関して独自にアクセスできる者、ということを示す14行目の「だから」によって明らかにしたからであると言える。

以上の分析から、宮城方言の「だから」は、①語られた経験を共有していること、②語られた出来事に独自にアクセスができること、この2点を示すことができる。このことから、宮城方言の「だから」は「認識的優先性(Heritage and Raymond, 2005, Stivers, 2008)」を示し、同調する手立てであると言える。

3.2 宮城方言の「んだ」

断片3は母親のMとその娘Dの会話である。データが録画される前に、2人はスーパーへ食料品の買い物に行っている。買い物中はMがショッピングカートを動かし、Dはその近くで品物を取るなどMの手伝いをしていることが多い。この断片ではMは調理をしているため、基本的にMはDに背中を向けながら会話をしている。Dはそのそばにある食卓テーブルの椅子に座り、携帯を操作しながらMと会話をしている。

断片3[台所_豆腐 0:40-]

- 1 M: hhhh((呼吸音))と-豆腐買ってくんの忘れた(0.7)豆腐:.=
- 2 D: =え買った↑じゃん.
- 3 M: え-ど->うそ:はく
- 4 D: あ↑るよ:.
- 5 M: >どごに::?<
- 6 D: どっかさ:
- 7 M: 豆腐? =
- 8 D: =あるよ, 買ったじゃん
- 9 (1.0)
- 10 M: あ↑:::[↑:::
- 11 D: [hhahaha .hな-え?¥買ったじゃん¥

12 (0.5)

13 →M: んだね::

14 D: うん.

この断片では、13行目に「んだね」が産出されている。まず、1行目でMは豆腐を買い忘れたと主張する。それに対してDは2行目で買い忘れていないと、1行目Mとは異なる主張をする。1行目の0.7秒の間合いで、Dは視線を食卓テーブルに移し、視線を落としたまま2行目を発話している。食卓テーブルには、MとDが買い物をしてきた食品がいくつかあり、Dは豆腐が食卓テーブルにあるかを確認していたと言える。3行目でMは「え」によって、Dの主張が自分の想定したものとは異なることを示し(Hayashi, 2009)、さらにそのことを「うそ」と明確化している。3行目までのやり取りから、MとDと一緒に買い物に行ったにもかかわらず、認識に差が生じていることは明らかである。

その後豆腐を買ったかどうかの確認が続く。Dは豆腐が家にあることを主張し(4行目)、Mは振り返り、食卓テーブルを自分の目で確認しながら、Hに豆腐がどこにあるのかを尋ねる(5行目)。6行目でDは「どっかさ」とMの質問には答えるものの、具体的な場所を示してはいない。しかし、Dは5行目までの時点で体の正面に携帯を両手で持っていた姿勢から、6行目の発話中に、右手を斜め後ろに向かって動かしていた。Dの斜め後ろ方向には玄関があり、Mは買ってきたものを片付けるまでに玄関に置いておくことがあった。つまり、この断片においてDは豆腐がある場所を特定できないのではなく、買ってきた物のどこかに豆腐があるという主張を、動作によって達成していると言える。Mも4行目の時点でDの顔が見えるように振り向いていたことから、Dが斜め後ろに右手を動かしたのは目にしていると言える。

しかし、7行目でMは「豆腐？」とDに確認を求めている。つまりこの時点でMは、まだ「豆腐を買っていない」というスタンスのままと言える。それに対してDは、左手で自分自身を指すような動作と共に確認を与える(8行目)。8行目のDの発話は具体的な場所は産出しておらず、実際にDが確認をしに行くようなこともなかった。しかし、9行目でMは「あ↑:: ↑::」と認識に何らかの変化があったことを示す。具体的かつ、明示的な確認はなかったが、Mが認識の変化を示したことで、Mは1行目の主張とは異なり「豆腐を買った」ということが「今ここ」で想起できたと主張していると言える。11行目でDが笑い出し、再び「買ったじゃん」と産出し、「豆腐を買った」ということについては議論するまでもなかったというDのスタンスを示している。そして、12行目でMは「んだね」と産出し同調を示す。この「んだね」は、変化したM自身の主張(豆腐を買ったということ)を改めて受け入れることを示すとともに、直前のDのスタンスをも受け入れていると言える。この後のやり取りが収束に至っていることから、「んだ」はMにとって「今ここ」で認識が変化したことを受け入れるものであったと言える。

断片3では、「今ここ」のやり取りを通して問題が解決された際に「んだ」が使用されていた。このように、宮城方言の「んだ」は「だから」とは異なり、「今ここ」のやり取りが焦点となった同調だと言える。

4. 考察

分析から、宮城方言の「だから」による同調は、語られている経験に独自にアクセスできること、共有されていることが焦点となっていた。一方「んだ」による同調は、「今ここ」のやり取りに焦点があるという違いが見られた。この同調と認識的優先性を同時に示すことができるという点において、宮城方言の「だから」は「んだ」よりも強く相手に同調するような手続きとして使用されているといえる。また会話参加者にとって「だから」による同調は、語られた経験へのアクセスが示されるため、他の会話参加者とある出来事に関して協同的に相互行為を組織していくことを可能とする手続きにもなるといえる。この手続きは、非難が続くことを避けたり、仲の良さを提示したりする環境において、利用可能だと言える。

参考文献

- Hayashi, M. (2009). Marking a 'noticing of departure' in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, 41, pp2100-2129.
- Heritage, J. & Raymond, G. (2005). The Terms of Agreement: Indexing Epistemic Authority and Subordination in Talk-in-Interaction. *Social Psychology Quarterly*, 68, pp15-38.
- 甲田直美(2019). 感動詞化する接続詞—コミュニケーションにおけるソレデ類, ダカラ類— 小林隆(編) 生活を伝える方言 会話 pp127-142, ひつじ書房.
- 日本記述文法研究会(編)(2009). 現代日本語文法7 くろしお出版.
- Stivers, T. (2011). Knowledge, morality and affiliation in interaction. In Stivers, T., L. Monada, and J. Steensig. (Eds.), *The Morality of Knowledge in Conversation*, pp156-183. Cambridge University Press.